

第四章 お茶会

その家の前には、大きなテーブルがあります。

三月ウサギと帽子屋がお茶を飲んでいきます。

ヤマネは、二人の間のテーブルの上にいます。

三月ウサギと帽子屋はアリスを見ると、「スペースがないんだ。スペースがまったくくない！」と言います。

「けど、スペースならいっぱいあるわ」とアリスは言うと、大きな椅子に座ります。

帽子屋は自分の時計を見て、「今日は何曜日だ？」と尋ねます。

「私は月曜日だと思うわ」とアリスは言います。

「私の時計では水曜日だよ」と帽子屋は言います。

三月ウサギは、彼の時計を彼のお茶の中に入れます。

アリスが驚きます。

「三月ウサギは何をしているのだろうか？」と彼女は思います。

それから、三月ウサギは時計を外に取り出して、それを見ます。

アリスは三月ウサギの時計を見て、「何て不思議な時計なの！」と言います。

時計は、その月のその日を示していますが、時間を示してはいないので。

「君の時計は年を示すのかい？」と帽子屋は尋ねます。

「もちろん示さないわ」とアリスは言います。

「だって、長いこと同じ年なんだもの」

「ふむ、私の時計と同じだな」と帽子屋は言います。

「ここではいつも6時なんだ」

「もっとお茶を飲みなよ」と三月ウサギは言います。

「ありがとう、でも私、お茶がまったくくないわ」とアリスは言います。

「私はどうやってもっと飲むことができるの？」

「ああ」と帽子屋は言います。

「君はいつだって、無よりも多くを持てるんだよ」

アリスは混乱して、怒ります。

アリスはテーブルから立ち上がると、木々の間を歩いて、歩き去ります。

帽子屋が、ヤマネをお茶のポットに入れようとしています。

「何てばかげたお茶会なのかしら！」とアリスは思います。

アリスが森の中を歩いていると、木の中にドアが見えます。

アリスがそのドアを開けると、ガラスのテーブルのあるホールがもう一度見えます。

「今度こそ、その庭に入りたいわ」とアリスは考えます。

アリスは鍵を取って、そのドアを開けます。

アリスがキノコのかげらを食べると、小さくなります。

それからアリスは、かわいらしい花々や噴水のある美しい庭の中へと歩いていきます。

庭のドアの近くには、大きなバラの木があって、アリスは3人の庭師に会います。

しかし、庭師たちは人間ではありません。庭師たちはトランプのカードで、彼らのそれぞれが、頭と手足を持っています。

庭師たちは白いバラを赤く塗っています。

アリスは庭師たちを見て、「こんにちは、私の名前はアリス。あなたたちはどうしてバラを赤色に塗っているの？」と言います。

「女王さまは、白いバラがお嫌いなのだよ」と5が言います。

「女王さまは、赤いバラしかお好きじゃないのさ」と7が言います。

「僕たちはバラを赤く塗らなければいけないんだ、さもないと女王さまが僕たちの頭をちょん切っちゃうのさ」と2が言います。

「あなたたちの頭をちょん切っちゃう？」と、驚いたアリスは言います。

すると突然、トランプの中の1人が「見ろよ！ 女王さまだ！ 女王さまだ！」と言います。

アリスが振り返ると、たくさんの人々が見えます。彼らは皆、それぞれが頭と手足のあるトランプのカードです。

クラブの兵隊や、ダイヤモンドやスペードの召使い、ハートやキング、そしてクイーンの子供たちがいます。